

リノベーション研究序説

——ハンナ・アーレントから考えるリノベーションの意味——

An Introduction to Renovation Study

Meaning of Renovation Based on Hannah Arendt's Thought

権 安理

GON Anri

Abstract

In Japan, where there is strong belief in newly built houses, renovation has attracted attention in recent years. Since renovation is a term and concept related to buildings, it has been analyzed most often from the perspective of architects and related persons. Many of them introduce cutting-edge cases and analyze the problems behind renovations. The results are great, and this paper relies on such conclusions. However, few have examined the ideological meaning of renovation. Therefore, this paper clarifies the meaning of renovation based on Hannah Arendt's thought. The paper has three main purposes. The first is to provide an overview of the situation surrounding renovation and define it, based on general-purpose and research books about renovation. Secondly, it aims to examine in detail the concepts related to renovation, relying on Arendt's thought. Lastly, it again clarifies the meaning of renovation based on the above considerations.

Key words : renovation, Hannah Arendt, commodity, thing, story

Ⅰ. はじめに

リノベーションという概念が注目されるようになってきている。それに言及する書籍が多数出版され、関連する様々なプロジェクトが生まれている⁽¹⁾。「新築信仰」が強かった日本で（加藤 2017：2）、中古住宅を購入してリノベーションをしたり、自宅やオフィス、施設などをリノベーションする人が増えてきているのだ。建築関係者からも、1990年代後半から「『新築の既製品』一辺倒だった住宅市場」が変化してきていることが実感を持って語られている（中谷 2007：11）。

だがリノベーションとは何であり、いかなることを意味するのか。リノベーションが建物に関する用語、概念であるゆえに、その分析は建築関係者や当事者の観点からなされてきたが、先端事例の紹介や背後の問題を検討したものが多い（小池ほか 2018：3）。成果は大きく、本論文もそれに大いに依拠しているが、他方でリノベーションの思想的意味を検討したものは殆どない。言い換えれば、実学的思考法の外でそれについて考察されてこなかったのである。そこで本論文は、このような状況を整理しつつも、リノベーションの意味について、ハンナ・アーレントに依拠して検討する。

このような関心をもった本論文であるが、大きく言って三つの目的を持っている。第一は、リノベーションをめぐる状況を概観し、その定義をすることである。これは基本的には、リノベーションを対象とした一般向け書籍及び研究書に依拠した考察である。第二は、リノベーションに関連する概念について、アーレントに依拠して詳細に検討することである。言い換えれば、状況や定義をふまえたうえでのアーレント解釈である。第三は、以上の考察をふまえたうえで、改めてリノベーションが持つ意味を明らかにすることである。

このような内容と目的を持つ本論文は、リノベーション事例の分析から帰納法的な考察を行うものでも、それらを包括する全体的な考察を行うものでもない。事例分析という手法は用いずに、言説分析によってリノベーションの意味を明らかにすることを通じて、今後さらに増加するであろう様々な事例を検証するための基礎的な研究となることを目指している。またそれと同時に、アーレントの思想の独自の解釈を通じて、その現代性^{アクチュアリティ}の一端を明らかにすることを目指している。

Ⅱ. 状況と定義——リノベーションの条件

1. 状況の概観：状況から条件へ

1) 新築信仰とその揺らぎ

詳細な定義については後述するが、リノベーションが大きく言って、「既存の建物に何らかの形で手を加えること」という意味を持つことに異論はなからう。ただし、日本では新築信仰が極めて強いことが知られている。“夢の新築マイホーム”という発想は、それが、多くの人が一生涯の中で最も多額のお金を使う（べき）憧れの対象であると同時に、古くなるにつれて価値を失っていくことを含意しよう（砂原 2018：2）。

日本の新築信仰は、欧米と比較するとある種の異様さをもって際立つ。欧米では、しばしば「住

宅に対する投資額と資産額が一致」をする(加藤 2017: 2)。つまり、価値や値段における経年劣化が著しくはない傾向にある。それに対して日本では、新築住宅を購入したときの価値=値段が最も高く、しばしばローンを払い終わったとき、つまりは投資し終えたときには、その価値は極端に下がっている。更地にしてしまった方が高い価値を持つこともあり、極端に言えば古い建物がまるで「粗大ゴミ」のように扱われているのだ(加藤 2017: 2)。

新築信仰を後押ししてきたのは資産価値ばかりではない。建物の耐久年数も影響している。例えばイギリスにおける「既存住宅の平均経年数」は80年であると示すデータがあるが、それに対して日本は僅か27年である(松永・漆原 2015: 18)。建物の価値が経年劣化せず、また耐久年数が長くなれば、当然そのメンテナンス、すなわちリノベーションが課題となる。他方でその逆であれば、スクラップ&ビルドという発想が主流になってこよう。

この点をふまえるならば、リノベーションに対する注目は、新築信仰や建物の価値に対する考え方に変化が生じていることを示しているだろう。なぜだろうか。この点については、まず例えば人々の心性や欲求の変化というソフト面と関連づけて考えることができる。三浦展によると、おおよそ1980年代までは「物を私有するという物質主義的な幸福感」を得ることが、欲求の充足という点で大きなウェイトを占めていた。だが1990年代、そして2010年代となっていくにつれて「所有や私有」から「自分らしさ」、さらには「他者とのつながり」といったものが求められるようになってきた(三浦 2011: 40)。所有や私有の最も高額なものの代表が住宅であるために、三浦の分析はリノベーション隆盛について考える際に極めて示唆的である。だが本論文では、心性や欲求というソフト面のみならず、むしろハード面における社会的もしくは歴史的な条件に注目したい。アレント風に言えば、リノベーション隆盛の「条件」——リノベーション・コンディションである⁽²⁾。

2) リノベーションの“条件”

戦後日本で住宅建設が重要課題であったことは言うまでもないが、数という点から考えると、それはいつまで必要だったのか。中川寛子によると、高度成長期終盤の1968年には既に住宅数が世帯数を上回っていた(中川 2015: 22-23)。この時点で住宅は十分に行き渡っており、市場は飽和していたのである。だが、住宅の建築は抑制されることはなかった。住宅建設が与える経済効果の影響の大きさから、「国は国民のお尻を叩いてきた」。それを抑制する策を講じることなく、むしろ建築を後押し続けてきたのだ(中川 2015: 23)。

その結果当然のように住宅の過剰供給状態となるため、それは例えば大量に発生する「空き家問題」として顕在化する。端的に言えば、家が余り始めたのだ。2014年に総務省が公表した調査によると、2013年における空き家率、すなわち住宅総数における空き家の割合は13.5%である。また2015年に野村総合研究所は将来の予想値を出したが、2018年には16.9%、2028年には25.5%の住宅が空き家になるとされている(中川 2015: 21-22)。

ただし興味深いのは、空き家問題が私的住宅に留まらない(とも考えられる)点である。公的

な建造物もしくは施設にも関連する問題は生じている。例えば「学校の空き家化」である廃校問題である。文部科学省の調査によると2017年度に廃校になった公立小学校は323校、中学校は93校である。もちろん、廃校はこの年に偶然大量に発生したものではない。近年では毎年300校以上、多い年だと500校以上の公立小中学校が廃校となっている（文部科学省 2019）。1992年の時点で136の小学校、42の中学校が廃校になり、少ない年でも143校（1993年）、多い年には537校（2012年）の公立小中学校が廃校になっている。廃校は恒常的かつ大量に発生し続けているのだ（文部科学省 2003；2019）。

つまり近年の日本では、私的な建物である住宅と、公共施設である学校が大量に「空き」状態になっているのだ。当然のことであるが、住む人がいなくなるから空き家が、通う児童生徒が減少するから廃校が発生する。つまりは、空き家と廃校の大量発生は、人の数に対して建物の数や規模が圧倒的に多い、大きいことから生じる。住宅と学校はもう十分すぎるほど建てられているのだ。この点に鑑みると、馬場正尊が次のように言っているのは極めて示唆的である。「都市を取り巻く状況は複雑になりすぎ、そもそもすでに土地はあらゆる物体で覆われている」（馬場 2011：6-7）。また建築家の松村秀一は次のように言っている。「既にこれまでにつくったストック」、すなわち建物は「十分すぎる程にある」（松村 2016：7）。

リノベーションが普及しつつある今日は、このような状況下にある。つまり、少なくとも数という点から言えば、十分な建物が供給されており、むしろ空き家や廃校の大量発生が問題となっている状況なのである。もちろんその発生自体が大きな社会問題であり、倒壊の危険性や治安の悪化、さらにはコミュニティの弱体化といった大きな課題と関連しており、対策が必要なのももちろんである。だが他方で、逆説的かつアイロニカルな言い方をすれば、建物が過剰供給され、かつ存在しているという状況は、リノベーションが普及する条件が整っていることを意味する。当然であるが、リノベーションは建物が既に存在することを前提条件とするからだ。このような意味で、例えば空き家は負の遺産であるが、リノベーションという観点から見ると「ポテンシャル」や「お宝」ということにもなる（嶋田 2015：61）。

リノベーションにはストック（既存の建物）が先行する必要がある。つまり、リノベーションはストックがあることで可能となる。したがって、今日はリノベーションの条件が整っている時代状況であるということになる。

2. リノベーションの定義：リノベーションとリフォーム

リノベーションの条件が住宅と施設の双方で整いつつあることを確認した。だが、私的な住宅と公的な施設でその意味合いは当然変わってくる。つくった主体もリノベーションをする主体も、建物の役割も全く相違するからだ。それぞれに対して異なった分析が必要となってこよう。本論文は、施設のリノベーションではなく、私的な建物である住宅（住宅を想定しているが、商店や小さなオフィスの場合もあるだろう）を基本的には想定して議論を展開している⁽³⁾。

では、改めてリノベーションとは何か。隣接する言葉や概念は多い。リフォーム、コンバージョ

ン、レストレーション、レスタウロ、インターベンションというものがあり(小池ほか 2018: 10)、さらにはリデベロップメントやリジェネレーションという概念とも関係する⁽⁴⁾。もちろん論者や文脈によって多義化、多様化することになるが、既に一般化された言葉であるリフォームとの対比から考えることは、日常感覚にも適合すると同時に重要である。なぜならリノベーションという言葉の普及は、それがあつる程度、建築関係の「業界用語」(加藤 2017: 4)から解放されて一般化することを意味するからだ。

専門書というよりも、一般読者向けの書籍に記された建築家の定義から参照しよう。中谷ノボルは、リノベーションとリフォームの相違について次のように述べている。まずその相違は絶対的なものではなく、双方ともに「住宅や部屋の改築、改装、または修復のこと」を示す。そのうえで、リフォームは「不便さの解消」を目的としているが、リノベーションは住居者の「生活スタイル」に合わせることを目的としているという相違があると指摘する(中谷 2007: 107)。古かったり壊れた建物や設備を新しくすることや、子どもが増えて部屋を増築することが前者の例示となっている。それに対して、「機能が少なくても、自分らしい生活スタイルを優先するニュアンスがある」のが後者であり、例えば「都心で静かに……猫と住みたい。通勤時間は自転車ですら15分以内で」という希望に沿つて改築修繕をするのがその例示とされている(中谷 2007: 107)。イメージしやすい例であるが、他方で子どもが増えて増築することが不便さの解消なのか、自分らしい生活スタイルへの適合なのかは難しいところでもある。

同じく建築家の嶋田洋平は、両語の英語の綴りに注目しながら次のように定義している。ReformはRe-formであり、「フォーム＝形をつくり直すこと」を意味する。それに対して、RenovationはRe-innovationであると考えられるゆえに、2段階の説明が必要となる。まず、innovationは「新たなアイデアや価値を創造・発明すること」を意味する(嶋田 2015: 55)。したがつて、それにReが付いたRe-innovationは、innovationの再チャレンジ、もしくは既存のinnovationに対する応答を意味することになる。このような意味では、リノベーションにおいては「発想」そのものの転換が特徴的となつてくるが、この転換は建物のみならず、住み方やライフスタイルの変容を伴うものであると述べられている(嶋田 2015: 55-58)。

二人の建築家の見解をふまえ、リノベーションとリフォームの違いを次のように定義することができる。まずリフォームとは、「建物やそれに付随する設備や物体に対して主に数量的・時間的な転換をさせること」である。例えば、部屋数が足りなくなったから(数量的)、建物が経年劣化したから(時間的)、という理由で行われるものである。したがつてそれは、新築を初期状態と考えたうえで、既存の建物等に量的な変化を加えること(拡大もしくは縮小)や、可能な限り初期状態に近づけること(修復)を、大きな目的としているということになる。

それに対してリノベーションは、「居住者の価値観の転換を、建物やそれに付随する設備や物体の変容に反映させることであり、したがつてそれは質的な転換を意味する」ものである。例えば、通勤せずに家で仕事をするを前提にしたつくり変えや、マンションから古民家に住み替えることに伴う古民家の修復であれば、それはリノベーションであると考えることができる。

以上のようにリノベーションの意味は、特にリフォームとの対比からある程度明らかになる。もちろん齟齬なく完璧に定義、区分することや、事例を矛盾なく分類することは不可能である。だが、考え方の要点を両者の相違という点から示すことを通じて、リノベーションを定義することはできた。だが他方で、リノベーションにこの定義以外の意味はないのだろうか。あるいは、この帰納法的発想から導き出される定義以外の含意はないのだろうか。

Ⅲ. リノベーションからアーレントへ——アーレントによる「商品／物／物語」区分

1. 前提：モノとコト

上述の定義と最後に述べた問題意識をふまえると、建物をつくる、もしくはそこに関わる主体である建築家の役割の変容について、嶋田が次のように述べているのは興味深い。リノベーションが住宅という建物に関係するのみならず、それ以外の何かにも関わることを示唆されているからだ。

モノのデザインだけをしていけばいい時代は終わった。それより重要なのはコトを起こしながら共感できる人たちを巻き込み、建物を取り巻くいい関係を生み出していく力だと思う（嶋田 2015：286）。

ここで、モノとコトという対概念が導入されている点に注目しよう。「モノのデザイン」という考え方は上述の定義で言えば、リフォームと親和性を持つように見える。建築家あるいは業者は建物＝モノをデザインして供給するが、年月の経過によってそれが問題を生じさせればリフォームが必要になるということだ。リフォームは、デザインされたオリジナル状態への回帰を目指す。それに対して、コトはどうだろうか。コトは「できごと」のコトであると述べられているが（嶋田 2015：286）、当然ながら建物それ自体はコト（出来事）ではない。建物＝モノとの関わり方、あるいはモノをとりまく関係性がコトを生むのだろう。したがって、コトは価値観の転換に関わるリノベーションと親和性を持つように見える。

リノベーションを考える際に、モノとコトの区別は極めて示唆的であるが、他方でこれらについて日常感覚や経験知からではなく、思想的な含意を考えることはできないだろうか。以下では、このような関心から、モノとコトに関連する概念である、アーレントにおける「商品／物／物語」について検討することで、Ⅳ章でリノベーションの意味を検討するための準備作業としたい。

2. 商品としてのモノ

まずはモノについて考えよう。まさに建物の「物＝モノ」とは何か。アーレントはその問題について、モノの価値を示す言葉の相違という観点から考えている。山本理顕が注目するように、その違いはvalueとworthであるが（山本 2015：116）、モノはどちらの価値を持つかによって異なる相貌を見せる、端的に言えば、違った“モノ”として現れるのだ。では、valueとworthの違

いはどこにあるのか。まずは、valueとしての価値を持つモノについて検討しよう。アーレントは経済学者A・マーシャルを引いて、valueが「常に交換における価値を意味している」(Arendt 1998=1994: 259) ことを確認したうえで次のように言っている。

なぜなら、労働の生産物であれ、仕事の生産物であれ、消費財であれ、使用対象物であれ、肉体の生命あるいは生活の便宜に必要なものであれ、精神生活に必要なものであれ、ともかくすべてのモノが「価値 (value)」となるのは、あらゆるモノが他のモノと交換できる交換市場においてだけである。(Arendt 1998=1994: 259) [訳語一部変更]

端的に言えば、モノがvalueとしての価値を持つということは、それが「商品」であることを意味する。そして、ある商品のvalueはそれ自体に内在しているのではなく、市場における位置で決定される。つまりは、他の商品との関係で相対的に決定する。アーレントはvalueが「社会の構成員の間で行われる交換の絶えず変化する関係の中に引き込まれるときにはいつでも存在する」とも説明しているが (Arendt 1998=1994: 260)、要するに商品に付けられた値段・価格がvalueなのである。

valueを持つ商品には、交換市場によって相対的にその価値が決まるということの他に、もう一つ際立った特徴がある。正確に言えば、交換可能性を補完する“また別の”特徴であるが、それは「匿名性」である。「マルクスが正しく主張したように、『独居している』人は『価値を生まない』」(Arendt 1998=1994: 260)。あるいは、モノが私的に作られ、私的に使用されるだけでは商品とはならない (Arendt 1998=1994: 259)。valueとしての価値は私的ではなく社会的なものである。例えば、ある人物が所有する、書き込みがたくさんある大切な書籍は、商品としての価値は皆無に等しいだろう。したがって、商品は必然的に不特定多数の買い手にとって価値のあるもの、つまりは匿名性という特徴を持つことになる。

ただし、これは商品を買う側、つまりは消費者側のみ当てはまることではない。匿名の消費者に向けてつくられた商品はまた、作り手の顔が見える必要もない。それは「作者」を持った「作品」ではないのである。重要なのは、作者の意向や意図よりも、商品としての価値を持つか否か、つまりは売れるかどうかである。また、買い手からすればそれは作品ではなく商品であるゆえに、価格と機能が重視される。

まとめよう。モノがvalueを有する商品とみなされるとき、それは、匿名性という特徴を持つことになる。逆に言えば、匿名性を持った商品として供給されて流通し、また消費されることで、それはvalueという尺度で測られる商品となる。ただし、この商品としての特徴は、同じモノでありながら商品とは区別される「物」と対比することでより一層極立つ。論点を先取りして言えば、商品も物も同じくモノであるために、相違は相対的なものであるからだ。以下では、商品とは相違する価値を持つ物について詳細に検討しながら両者の相違を明らかにしていく。

3. 物としてのモノ

1) 客観性と耐久性

モノが、value以外の価値を持つ可能性はないのか。アーレントはその価値がworthであると考えているが、あるモノがworthを持つと見なされるとき、それは商品 (commodity) ではなく物 (thing) となる。では物とは何か。あるいはworthとはいかなる価値か。

まずworthは、相対的価値であるvalueと違って、「物それ自体の客観的な質」とであると説明される (Arendt 1998=1994 : 260)。この「客観的」という言葉は、物に本来的に備わっているという意味で使われているが、アーレントはこの点を次のような例を使って説明している。「テーブルの脚を一本とれば、もはやテーブルのworthはなくなる」 (Arendt 1998=1994 : 260) [訳語一部変更]。テーブルはモノであるが、それは人間が自然物である木を加工することによってつくった道具である。そして、道具は必ず機能や役割を持っている。テーブルは「パンを置いて食事をする」ための道具であり、それがテーブルの価値としてのworthである。つまり端的に言えば、物は道具であり、worthとしての価値を持つことは、まずは道具としての機能や役割を持つことを意味する。

だが他方で、機能は商品の特徴でもある。つまりテーブルは商品でもあるのだが、その違いはどのように考えたら良いのか。これは物が持つ「耐久性」に関係してくるが、アーレントは次のように言っている。

世界の物は、たしかに、人間が生産し、使用するものである。しかし、世界の物がその人間から相対的に独立しているのは、この耐久性のおかげである。しかも、世界の物は、それを作り使用する生きた人間の貪欲な欲求や欲望にたいし、少なくともしばらくの間は抵抗し、「対立し」、持ちこたえることができる。それは世界の物の「客観性」のゆえである。この観点から見ると、世界の物は、人間生活を安定させる機能をもっているといえる。(Arendt 1998=1994 : 224)

なぜ、道具としての物は耐久性を持つのか。耐久性と関連する客観性とは何か。この点についてアーレントは、物が持つ「固さ (solidity)」という観点から説明している (Arendt 1998=1994 : 223)。例えばテーブルという道具 (加工品) はある種の強度を持つが、耕作地は放置されると直ちに無化する (Arendt 1998=1994 : 226-227)。この対置は、アーレントが人工物と自然を対比していることに対応しており、この点から良く理解できる⁽⁵⁾。だが他方で私見では、固さという観点は誤解を与えかねない。物は確かにある種の固さを持って存在するが、この点を固い／軟らかいという素材の質の相違から考えるべきではない。むしろ耐久性は、物が機能や役割を持った道具であることに、より本質的に関係するのではなからうか。

ここで次のような問いをしてみよう。そもそも物は人間がつくったにも関わらず、なぜ「人間から相対的に独立」しているのか。その理由は、物にまつわるトートロジーにあると考えられる。

テーブルを例にして、この問いを変換してみよう。そうすると、“テーブルは個々人の思いや感情(主観)とは別に、なぜ「パンを置いて食事をするための道具」として客観性を持って存在しているのか”という問いとなる。それはなぜか。

問いが素朴であるように、その答えはある意味で極めてシンプルなものとなる。そもそもそのような機能を持った道具を我々はテーブルと名付けている、これが答えである。それを踏み台として使う機会があるかと、幼児が障害物だと思おうと、それはテーブルが本来持つ意味とは別用に捉えられているだけであって、任意かつ個別の主体に偶然、踏み台として、障害物として見られているに過ぎない。あくまでテーブルは個々人の主観とは別に、客観的な機能を持った道具として存在する。テーブルは「食事をするための道具」であるが、それはなぜかと言えば、「食事をするための道具」こそがテーブルであるからだ。ある種のトートロジーである。

したがって、次のように言うことができる。物の耐久性は素材の強度やそれが加工品であることのみならず、むしろ機能を持った道具であることに由来する。そして、物の機能は主観から独立して客観性を持ったものとして存在する。その機能は付随的なものではなく、道具に本質的なものであるという意味で、偶然性に左右されない強固な力、すなわち耐久性を持つ。何十年も、あるいは世代を超えて使用されたテーブルが汚れ古くなったとしても、「食事をする」という機能を失わなければ、それはテーブルとして存在し続けることができる。

だが他方で、それは商品としての価値は喪失するかもしれない。物としての worth は留めているかもしれないが、商品としての value を著しく低下させることはあり得る。物と商品は同じモノであるが、道具としての価値である worth から見るのか、商品としての価値である value から見るのかによって、物と商品という異なったモノとして現象するのだ。

2) 「消費する／使用する」の相違

だがそうであるとするならば、先に引いたテーブルの例の扱いには注意すべきである。「テーブルの脚を一本とれば、もはやテーブルの worth はなくなる」。この例の場合、テーブルは商品としての価値 = value をも失うであろう。したがって、worth と value の相違が明確化されているとは言えず、アーレントの意図もそこにはない。テーブルはアーレントが好んで使う比喩であるが、この例にさらに検討を加えることで、商品と物の際立つ特徴を明らかにすることができる。それは、モノに外在する、あるいは付加される特徴であるが、この点に関連してアーレントは次のように言っている。

使用対象物が衣類であるような場合、使用とは緩慢な消費のことにほかならないと結論づけたいであろう。しかし、すでに触れたように、この考え方はまちがっている。なるほど使用すれば解体は避けられない。しかし、使用にとって、これは付随的なことである。ところが他方、消費にとっては、解体こそ本質的なものなのである。(Arendt 1998=1994: 226)

商品か物かということは、モノをどう扱うのかにも依存する。名詞の特性は、それを対象とした動詞の相違によっても決定される。つまり、モノ＝名詞に付加される動詞（ヒトの動作・関わり方）に影響されるということだ。商品は消費されるが、物は使用される。consumeには消尽する、使い果たすという含意があるが、ここで解体されるのはworthではなくvalueである。修繕すればまだ使用できるテーブルが、量販店で買い直す方が安いために放棄される。これが消費であるが、アールトは消費にはそもそも対象の解体という意味が含まれていると言っているのだ。つまり、商品を購入して消費することは、そのworthとしての価値とは無関係に、劣化させるという意味を既に持っている。したがって、商品は消費される過程で必然的にそのvalueを低下させることになる。

だが他方で、物の使用において解体は本質的ではない。結果はともかく、使用は解体を目指すものではない。そうであるゆえに、脚がとれても修繕されて使用され続けるテーブルがある。つまり、商品と物の相違は、valueとworthという価値の相違のみならず、モノに対してヒトが働きかける行為の違い、すなわち名詞に外在して付加される動詞によっても決定されるのだ。ヒトがモノを消費するとき、それは商品となり、他方でヒトがモノを使うとき、それは物になる。

3) 固有性

この動詞の違いは、また興味深い論点を導き出す。なぜ物は、商品と違って使い続けられるのかという論点である。先述のように、物の価値は客観的なものであるゆえに、耐久性を持って存在し得る。だが結果的に、あるいはアクシデントからその機能に支障をきたしてworthを失うことがある。だが他方で、機能さえ回復すれば、物の価値は低くなるとは限らない。商品としての価値は著しく低下するかもしれないが、物としての価値は商品ほどに下がるとは限らない。このことはもちろん、物の機能や役割に耐久性がある、つまりは経年劣化してもそれが保存され続けるからであると記述的かつ事実確認的に説明することはできる。だが、そもそもそれはなぜ残されたのか。

確かに機能は耐久性の大きな要因ではある。だが理由ではない。つまり、因果関係もしくは前提条件を説明するものであるが、なぜそれが消費されずに使用され続ける（た）のかという理由にはならない。要因と違い、理由は意志を必要とするからだ。たとえ、道具としての機能が保存されていたとしても、それを使い続けたいというヒトの意志がなければそうされることはない。脚が折れたテーブルが修復されて使い続けられるためには、意志によって理由が与えられることが必要なのだ。では、その理由とは何か。ヒトがそれを使い続ける理由は何か。

唯一ではないが、大きな理由の一つになり得るのが「固有性」である。例えば、愛着のあるテーブルは古くなっても修繕しながら使われ、思い出を刻んだ家は引き継がれる。物が持つ客観性が耐久性の要因であるとするならば、固有性は耐久性の理由となり得る。代替可能な商品ではなく、例えば「他ならぬこのテーブル」と見なされるからからこそ、それを使い続けたいという意志が生まれるのだ。このような意味で、物の代替不可能性すなわち固有性が、物の価値の源泉である

と言える。

まとめよう。モノがworthを有する物として使用されるとき、それは、耐久物という特徴を持つことになる。そして、しばしばその耐久性は固有性によって補完される。逆に言えば、固有性を持った耐久品として使用されて(場合によっては修復されながら)存在し続けることによって、それはworthという意味での価値を持った物であり続ける。またこれと対照的に言えば、商品は匿名性を持った消耗品であると言うことになる。

4. 物語

本章の冒頭で、建築家の仕事として、コトのデザインが注目されるようになった点が指摘されていたことを思い起こそう。建築家には建物を製作することのみならず、「いい関係」がつけられるような「コト・出来事」を起こすことが求められるという見解であった。では、モノとは相違するコトをどのように考えたら良いのか。再びアレントに依拠しよう。アレントは「コトや出来事 (affairs)」について次のように言っている。

むしろ、ここでいう世界は、人間の工作物や人間の手が作った製作物に結びついており、さらに、この人工的な世界に共生している人びとの間で進行する「コト・出来事 (affairs)」に結びついている。世界の中に共生するというのは、本質的には、ちょうど、テーブルがその周りに坐っている人びとの真中^{ビトウイン}に位置しているように、物の世界がそれを共有している人びとの真中^{ビトウイン}にあるということの意味する。(Arendt 1998=1994: 79) [訳語一部変更]

再びテーブルの例である。テーブルはモノであるが、モノが集積することで「世界」が形成される。世界はモノと同様に耐久性を持つが (Arendt 1998=1994: 223)、その世界を舞台として行われる「活動 (action)」や、テーブルを囲んでなされる「言論 (speech)」によって、出来事としてのコトは生起する。そして興味深いのは、活動や言論によって展開されるコト・出来事を、アレントが「物語 (story)」とも言い換えていることである (Arendt 1998=1994: 298)。より正確に言うならば、コト・出来事がstoryを持ったものとして記憶され共有されるときに、それは物語になると言える。

ただし、物語という言葉には注意が必要である。通常思い浮かべられるような物語、例えば小説や劇には作者がいるからだ。だがそれと違い、アレントが想定する物語は作者がいない点の特徴とする。したがって、それはデザインされるものではない。物語には登場人物も主人公もいるだろうが、作者はいない。物語は「使用対象や芸術作品の形で眼に見える」ものとして残されることもあるが (Arendt 1998=1994: 298-289)、それは結果論である。

物語は、端的に言えばヒトとヒトが関係することで生まれる出来事から成る。アレントが、登場人物はいるが作者がいないことを強調することから分かるように、物語はaffairであると同時に (和製英語的な意味での) 一過性のハプニングでもある。では、出来事はなぜ生じるのか。

あるいは言い方を変えれば、いかなる理由で生じるのか。

そして、このモノの世界から、人びとの特定の客観的な世界的利害／関心 (interests) が生じてくるのである。この利害／関心 (interests) は、まったく文字通り、なにか「間にある」(inter-est) ものを形成する。ほとんどの活動と言論は、この介在者^{イン・ビトウイン}に係わっている。(Arendt 1998=1994 : 296) [訳語一部変更]

仲正昌樹が指摘するように、アーレントはinterestsを「間にある」というinter-estという言葉で補足説明してもいるので、利害というよりも関心という語が相応しいように思われる(仲正 2014 : 319)。そうであるとするならば、言論と活動によって構成される物語は、モノに対する相互的な関心から生じることになる。まさにヒトとヒトの間(inter)に存在して、介在者として『「関係付け、結び付ける relate and bind ~ together」性質をもった“もの”』(仲正 2014 : 320)が関心事となることで出来事は生まれ、それが共有・記憶されることを通じてリアリティを持った物語が存在することになる。

まとめよう。モノに対する関心からヒトとヒトが関係することで、コト・出来事が生じる。それはあくまで一過性のハプニングであるが、共有され記憶されることを通じて、ある種のリアリティを持った物語として、触知はできないが意味(meaning)を有した存在となる。またこのような点から、アーレントは明示的に語っているわけではないが、物語の価値はmeaningであると考えることができる。それは関係する人々にとって意義のある出来事なのだ。

IV. アーレントからリノベーションへ——リノベーションの再考

1. 図式化

II章では、リノベーションをめぐる状況を概観し、リフォームとの相違という観点からリノベーションの定義を行った。III章では、アーレントに依拠しながら、「商品／物／物語」の相違について検討した。本章では、以上をふまえて再びリノベーションについて考えることを通じて、その意味を明らかにしたい。そのための準備として、II章の定義と、IIIのアーレントに拠る区分について図式化した整理を行っておこう(表1・表2)。

表1. リフォームとリノベーション

リフォーム	数量的・時間的	拡大と縮小・初期状態への接近
リノベーション	質的	価値観の転倒・反映

表2. アーレント「商品／物／物語」区分

		価値・指標	人称	時間性	存在形態
モノ	商品	value	匿名性	消耗	交換可能性
	物	worth	固有性	耐久	客観性
コト	物語	meaning	共有性	記憶	現実性

もちろんこの分類は絶対的ではなく、相対的なものではある。例えばリノベーションにも量的な変化は含まれるだろうし、誰がつくったのか分かるという意味で固有性を持つ商品もあるだろう。だが、この表1と表2の図式・整理をふまえることで、今日普及しつつあるリノベーションの意味の一端がより一層明らかになるのではなかろうか。

2. 商品から物・物語へ

1) 商品とリフォーム

Ⅱ章で指摘したように、日本では新築信仰が強く、経年でその価値は失われていくと考えられていた。このことは、住宅が商品であると見なされていることを示す。新品の商品、すなわち新築の住宅は買ったときが最も市場価値が高い。だが経年劣化することで、他の商品より相対的に低いvalueの商品となる。極論を言えば、商品としての住宅はお金を消費して買うモノであると同時に、消費することでその価値が無くなる消耗品であるということになる。

また、住宅のづくり手は作者としての建築家ではなく、匿名化された商品の供給者としての業者である。かくして「既製品」(中谷 2007:10)であり、「市場の中のパッケージ商品」(山本 2015:234)としての住宅が売買され、市場によってその価値が決定されることになるが、商品としての住宅を修繕することがリフォームということになろう。リフォームにおいては、可能な限り初期状態に近づけることが目指される(時間的変更)、あるいは量的な変更をすることが目指されるが、それは価値観の転換を伴う質的な変化を目的としたものではない。

2) リノベーション

これに対してリノベーションはどうか。「大掛かりなリフォーム」という認識もあるのは確かだが(中谷 2007:10)、リフォームと量的に異なる修復を意味するに留まるのか。あるいは、安価に商品を購入するための手段に過ぎないのか。この点に関連して、多くのリノベーション事例に関わっている馬場正尊が次のように指摘しているのは興味深い。

……人々は、新築が建たないから仕方なくリノベーションをするわけではないし、都市のストックをなんとかしようと思っているわけでもない。……古い建物を知恵と工夫で使いこなすということ自体がクレバーでカッコいいと思っている。(馬場 2011:300)

リノベーションをする人々は「古い建物」を経年劣化した商品と見なしているわけではない。では、それは物と見なされているのだろうか。第一に、古いか否かに関わらず、住むための道具であるために、それは商品というよりも物であると言える。このような意味では、その古い建物は耐久性を持った道具としての価値(worth)を持つ物である。だが第二に、それは物以上であり、この点がリノベーションの意味に関係してくる。

この点について、①「古い建物を知恵と工夫で使いこなすということ」と、それに対する②「クレバー」という見解に分けて考えてみよう。①で注目すべきなのは、「使いこなす」という動詞である。消費する商品と違い、物は使用する対象であった。だがここでは、使用するという言葉に、さらに「上手く扱う、自分の思いのままにする」といった意味を持つ「熟す」が付加された「使いこなす」という言葉が用いられている。つまり、ここで想定されているのは、物に対して自分なりの修復を加えることによって、それ自体が持つ価値を引き出しつつも、自分(たち)の意向に適合させるということである。

このように考えると、モノを物と見なすことによって修繕を加えて、自分(たち)に適合するようカスタマイズすることが、リノベーションであると考えることができる。別の文脈ではあるが、嶋田洋平がリノベーションを「ほしい暮らし」を「自分でつくる」ことであると表現しているのも、この点に関わるだろう(嶋田 2015: 270)。業者に依頼するリノベーションであろうと、DIYによって文字通り自分(たち)で行うセルフリノベーションであろうと、それは各人の固有のライフスタイル(暮らし方・生き方)にとって重要な「意味」を持つような転換なのである。ここにはまず、客観的な道具としての価値のみならず、個人にとっての意味があるという点での固有性がある。さらに、古い建物に価値を見出しつつも、それを自分なりのライフスタイルに合わせて直すという価値観の転倒もある。

次に②について考えよう。これが示しているのは、リノベーションに対する価値判断である。つまり、モノの修復やカスタマイズという個別のかつ具体的なリノベーションの内容のみならず、リノベーションをすることそれ自体が大きな意味を持つようになってきたのだ。リノベーションはそれ自体が出来事なのである。例えば古民家に手を入れてライフスタイルに合わせて使いこなすことは、自分にとって意味のある大きな出来事であり、またそれがさらに他者にも共有されたときには、一過性の出来事というよりも、一つのstoryを持った物語となると言える。この点を別の角度から説明しよう。「S is P」という言明で示される価値判断は、判断を行う主体だけに向けられたものではなく、潜在的に他者に対して賛同を求めるものである。すなわち、「Aはクレバーである」という言明は、他者にもそう認めて欲しいという承認願望、共感要求を伴う。「Aはクレバーである」との判断を、できれば他者にも認めて欲しい」ということだ。

そうであるとするならば、リノベーションに関して次のように言われていることは極めて示唆的である。「与えられたものの中から選ぶよりも、自分の手でつくった方が楽しい。気がついたら、ほら、仲間も増えている」(嶋田 2015: 9)。「楽しい」は、リノベーションに関する価値判断である。それは自分にとって「楽しい」という意味をもつ出来事であるが、そこに留まるとは限ら

ない。その出来事が生じる過程で、他者との関係が(再=Re)構築されることがある。このことは、リノベーションという物に対する関わり方が、他者にも共感されることを通して、共有された物語となることを意味するだろう。したがってリノベーションは、物と物語の結合という意味を持つのである。

V. 結語

本論は、アーレントの思想をふまえたうえで、リノベーションの意味を考えることを大きな目的としていた。改めて以下の点を、本論の結論として述べておこう。

第一に、リノベーションは、「物」の価値に対する再評価と修復に関わる。住宅はvalueを持った「商品」であるのみならず、客観的な価値(worth)を持ち、耐久性と固有性を有する「物」であるゆえに、その価値はリノベーションによって存続する、もしくは引き出されることが可能となる。第二に、リノベーションは、「物」に関係することを通じて生み出される「物語」に関わる。引き出された「物」の価値は、個人の価値観に適合するように調整されることで有意義な出来事となり得る。だが、その出来事は他者の共感・承認を得ることで、さらに人々にとって有意義な出来事、すなわち「物語」となり得る。したがって、リノベーションは数量的・時間的というよりも質的な転換であり、さらには「人と人々」にとって意義のある意味の変換であるということになる。

注

- (1) 例えば『リノベーションまちづくり』(清水 2014)を書いた清水義次が代表取締役を務める(株)リノベリングでは、リノベーションスクールを全国各地で継続的に開催しており(リノベリングHP)、また『都市をリノベーション』を書いた馬場正尊が関わっている東京R不動産は、「一風変わった物件も、人によっては、それが宝物のような空間」であるという認識からユニークな中古物件を紹介している(東京R不動産HP)。
- (2) アーレントの『人間の条件』は、人間の「本性(nature)」ではなく「条件(condition)」を考察するものであるが(Arendt 1998=1994: 223)、本論文の表現はこの点を参考にしている。
- (3) 公共空間のリノベーションについては、馬場(2013)を参照。また、公共施設である廃校の活用については、権(2012)で詳細に論じた。
- (4) 松永・漆原(2015)では、イギリスにおける意味の相違について次のように述べられている。まず、「古家に手を入れて使いやすくする程度の改装」がリノベーションである。また、「その規模が大きくなりある地域の広がりを持つてくる」ような場合はリデベロップメント(再開発)、そして「その目的が地域の社会問題の改善に結びつく」ような場合は、リジェネレーション(再生)と呼称されることが多い。さらに、「歴史的な建造物などが「新しい用途に適合するように修復」されることはコンバージョン(用途変更)と呼称される。ただし、これらの区分は必ずしも明瞭なものではなく、「境界があいまい」でもある(松永・漆原 2015: 17)。
- (5) この点は、もちろん「仕事/制作(work)」と「労働(labor)」の区分に対応している(Arendt 1998=1994)。

参考文献

- Arendt, Hannah, (1958) 1998, *The Human Condition*, The University of Chicago Press. (= 1994, 志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫)。
- 加藤耕一、2017、『時がつくる建築：リノベーションの西洋建築史』東京大学出版会。
- 小池志保子ほか、2018、『リノベーションの教科書：企画・デザイン・プロジェクト』学芸出版社。
- 権 安理、2012、『廃校の社会学理論：なぜ廃校は活用を求められるのか』『応用社会学研究』No.54：161-172。
- 、2018、『公共的なもの：アーレントと戦後日本』作品社。
- 嶋田洋平、2015、『ほしい暮らしは自分でつくる：ぼくらのリノベーションまちづくり』日経BP社。
- 清水義次、2014、『リノベーションまちづくり：不動産事業でまちを再生する方法』学芸出版社。
- 砂原庸介、2018、『新築がお好きですか？：日本における住宅と政治』ミネルヴァ書房。
- 中川寛子、2015、『解決！ 空き家問題』ちくま新書。
- 仲正昌樹、2014、『ハンナ・アーレント「人間の条件」入門講義』作品社。
- 中谷ノボル+アートアンドクラフト、2007、『みんなのリノベーション：中古住宅の見方、買い方、暮らし方』学芸出版社。
- 馬場正尊、2011、『都市をリノベーション』NTT出版社。
- 、2013、『RePUBLIC 公共空間のリノベーション』学芸出版社。
- 松永安光・漆原 弘、2015、『リノベーションの新潮流：レガシー・レジェンド・ストーリー』学芸出版社。
- 松村秀一、2016、『ひらかれる建築：「民主化」の作法』ちくま新書。
- 三浦 展、2011、『これからの日本のために「シェア」の話をしよう』NHK出版。
- 山本理顕、2015、『権力の空間／空間の権力：個人と国家の〈あいだ〉を設計せよ』講談社選書メチエ。

ウェブサイト

- 東京R不動産ホームページ、<https://www.realtokyoestate.co.jp>、2020.8.30.閲覧。
- 文部科学省、2003、「廃校施設の実態及び有効活用状況等調査研究報告書」、https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyosei/03062401/houkoku_pdf/houkoku.pdf、2020.8.30.閲覧。
- 文部科学省 大臣官房文教施設企画・防災部施設助成課、2019、「廃校発生数・活用状況 廃校活用に関する手続きについて」、https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2019/06/03/1414781_2.pdf、2020.8.30.閲覧。
- リノベリングホームページ、<https://renovaring.com>、2020.8.30.閲覧。